

「梶を絶え」「梶緒絶え」の問題

佐藤 茂 樹

『新古今』入集歌で『百人一首』にも採られた曾禰好忠の「ゆらのとをわたるふな人かぢをたえ行へもしらぬ恋のみちかも」について興味深いことがある。「かじを」に関して、現代の代表的な『新古今』の注釈書『新古今和歌集全評釈』において、久保田淳氏は「かじを失つて」と語釈されている。一方、現代の代表的な辞書『日本国語大辞典』では「櫓や櫓を船にとりつける縄」として好忠のこの例歌を引いている。この例歌を文学的に解釈すれば「舟人」のどうしようもない絶望感が、解決しようもなく、前進すべきすべもしらない恋愛に悩む者の心理表現へと転ずるところが、際立つてすぐれている」（久保田淳氏前掲書・一八二頁）と考えることが適切であり、一方語学的に考えれば、「絶ゆ」が自動詞であることから目的格「を」をとることはないことを重視し、梶緒が切れて思うように進めない舟人の歎きと、恋の不如意の歎きとを重ねて考えていると言える。

この間のことについては、吉海直人氏の一連の御研究に詳しい。そこでは、「絶ゆ」が自動詞であることを重要視され、「緒絶え」を根拠として「梶緒絶え」は表現として可能であると考察された。更に、『夫木和歌抄』の「緒」の項に「須磨の海人の浦漕ぐ舟の梶緒絶え寄るべなき身ぞ悲しかりける」（小町）、「梶緒」の項に「契りこそ行方も知らぬ由良の門や渡る梶緒のまたも結ばで」（為家）の存在を指摘され「原歌はいざしらず、新古今時代には「梶緒」が肯定されていたのではないだろうか」と結論づけられている。本稿では、吉海直人氏の説に依りつつ、好忠歌においても「梶緒」であったことを考察したい。

吉海直人氏は前掲書『百人一首の新研究』(一三三頁)において、百人一首の古註を整理されて

① 「梶を失って」

② 「梶を折って」

③ 「梶を捨てて」

④ 「梶がなくなつて」

とにまとめられた。『新古今』の古註においては、常縁原撰本『新古今集聞書』(福岡市美術館黒田家本)において、「かぢをたえはかぢをおさめたる心也。由良の渡は大事なるわたりなればかぢをおさず波にまかせてやる也」と注している。流れが早いので楫を漕がないで、その早い流れに舟を委ねるといふ考えである。こうした説を採る立場として、その他『かな傍注本新古今和歌集』(後藤重郎蔵本)に見ることが出来る。

『百人一首類常聞書』では「行舟の中にて梶をたえたる也」と記されており、「梶を」か「梶緒」かはつきりしないが、古注は「梶を」説を採っていると言える。「絶ゆ」の解し方に違いはあるが、古注が「梶を」説を採っていることが現代の代表的な注釈書において踏襲されていると考えられる。加えて「行方もしらぬ恋の道」という「あてどない恋の海に漂う」絶望感⁵は、「梶緒」が切れた情況より、「梶」を失いそのため絶望感に杳然としている舟人の景が印象的で鮮明であるからだと考えられる。

二

「梶」の詠まれ方を見ると、八代集においては以下のようである。〔新古今〕の好忠歌は除く〕

① 久方のあまのかわらのわたしもり君わたりなばかじかくしてよ
〔古今〕秋上・一七四 よみ人しらず

② かじにあたる浪のしづくを春なればいかさがさちる花と見ざらむ
〔古今〕物名・四五七 兼覧王

③ 白浪のよするいそまをこく舟のかちとりあへぬ恋もするかな
〔後撰〕恋二・六七〇 大伴黒主

④ あまのすむ浦こく舟のかちをなみ世を海わたる我ぞ悲しき
〔後撰〕雑一・一〇九〇 小野小町

⑤ あまのがはわかれにむねのこがるればかへさのふねはかちもとられず
〔金葉二〕秋・一六二 三宮

⑥ あみだぶとなふるこゑをかちにてやくるしきうみをこぎはなるらん

〔金葉二〕雑下・六四七 源俊賴朝臣

⑦ うらづたふいそのとまやのかち枕ききもならはぬ浪のおとかな
〔千載〕羈旅・五二五 皇太后宮大夫俊成

⑧ かちをたえゆらのみなどによるふねのたよりもしらぬおきつしほかぜ

〔新古今〕恋一・一〇七三 摂政太政大臣

⑧の例歌は好忠歌を本歌としており、「梶を」か「梶緒」かは断定出来ない。④の例歌は「梶がないので」と解すべきである。八代集の例は、「梶隠す」「梶に当たる」「梶取る」「梶無し」「梶」「梶枕」であつて「梶緒」の例はない。八代集以外も、同様に「梶緒」の例はなく、「梶の音」「かちおと」「かちのなき」「かちなし」「楫間」「かちはなひきそ」「かぢしもあらなん」「かぢさをなくは」の例を見ることが出来る。

好忠歌の先行歌として、小町の歌「すまのあまのうらこぐ舟のかちをたえよるべなき身ぞかなしかりける」(『夫木和歌抄』一五九〇六番「歌枕名寄」四二八六番)が考えられるが、この例歌は『小町集』にはなく、『小町集』には同想の「すまのあまのうらこぐ舟のかちよりもよるべなき身ぞかなしかりける」(七六番)がある。新古今時代には、好忠歌の影響を受けた例、良経歌「新古今」一〇七三や、「なにはがたむそぢの浪にうかぶふねはかちをば君にまかすとしれ」(『拾玉集』二八五九)が見られることから、『夫木和歌抄』は好忠歌の「梶を絶え」が混入したもので、本来は『小町集』の「かちよりも」であつたと考えられる。「梶」と「絶え」を結びつけて詠む歌はこの好忠歌と好忠歌の影響を受けた歌にしかない。好忠歌の「梶を絶え」は伝統的な詠み方に拘らない、新奇な表現を用いる好忠らしい表現と言え、「梶」の例歌からは「梶を」か「梶緒」かは確定出来ない。しかし、「梶」と「絶ゆ」との詠み合わせはなく、④の「かじをなみ」、「万葉」二〇九二「楫棹なくて」のように、梶がないことは「梶無し」と発想されるのではないかと思われる。

三

「絶ゆ」の詞は、「ちぎりも絶えぬ」「命も絶えなまし」「涙ぞ絶えぬ」「白雲の絶えず」「道も絶えつつ」「跡絶えて」「水は絶えはてて」「氷室ぞ今も絶えせざり」「ゆめ絶えて」「おと絶えて」「ねを絶えて」「けぶりや絶えざらん」「見る目は絶えぬ」「ながれ絶え」「われや絶えせる」「中河の絶えしより」「みそぎ絶え」「水絶え」「たよりも絶えはてぬ」「おもひ絶え」「けぶり絶えにし」「人の絶え」「声だに絶えて」「こゑ絶え」「ことのは絶え」「雲の絶え」「かけ絶え」「ふみ絶え」のように、種々詠じられている。「絶ゆ」の自動詞としての表現が見られる。自動詞にも「を」をとるこ

とがあることは指摘されているが、「絶ゆ」に關していえば、今問題にしている「梶を絶え」を除けば「根を絶え」だけである。「雲を絶え」「文を絶え」などもあつても良いと思うがそういう例歌はない。「梶を絶え」に「梶緒絶え」の可能性があることを考えると、「根を絶え」には、例外ということではない、特殊な事情があるのではないかと想像される。八代集から例を挙げる。⁽⁸⁾

- ① わびぬれば身をうき草のねをたえてさそふ水あらばいなむとぞ思ふ
〔古今〕雑下・九三八 小野小町
- ② 水のおもにおふるさ月のうき草のうき事あれやねをたえてこぬ
〔古今〕雑下・九七六 みつね
- ③ あやめぐさかけしたもとのねをたえてさらにこひぢにまどふころかな

〔後拾遺〕恋三・七一五 後朱雀院御製

「絶ゆ」に対する語が「ね」の一字であることが特殊な事情の理由の一つとして考えられる。慣用表現と考えられる「いをぬ」「ねをなく」も一字である。用法としては「根絶えて」なのであるが、調べ上の要請から「ねを絶えて」として一般化したと考えられる。「梶」は一語ではないので、「ねをたえて」の例には当てはまらない。「梶を」説は「を」を間投助詞と考えても、これのみの例であつて非常に特殊な例と言わざるをえない。「梶を絶え」のみが例外とするよりは、「梶緒絶え」とする方が、積極的な理由とはならないが、蓋然性は高いと思う。次に内容的側面から考える。ここでは「根を絶えて」は浮き草等、草に対する形容である。浮草は『和歌大辞典』に次のように説明されている。

寄るべない根無草を、「浮き」の同音から「憂き世」を導き、その故に不遇である我が身によそえ、萍のなびくさまを我が恋心の比喩としている。以上のごとく萍そのものを詠ずるのでなく、単なる比喩の具としているに過ぎないのが特徴

①の例歌の浮草を比喩と見ると「ねをたえて」は作者自身のことであり、作者の願いでもある。憂さのため、今の状況を断ち、新しい生活を求めていると考えられる。「ねをたえて」は根無しの状態を言うのではなく、むしろ意志をもって根を断つという意味が込められていると思われる。竹岡正夫氏は①の小町歌を「憂きこの身を浮き草の根を断ち切るように今の境遇からすっぱり縁を絶つて」と考察されている。「ねをたえて」と表現されているものの、意味的には「根を断ちて」である。「断つ」は他動詞なのであるから格助詞「を」とるのは問題はない。では、なぜ「ねをたちて」と表現しなかったのかが問題である。「ねをたえて」の「たえて」は「たえて生くべくもあらず」といった、初句「わびぬれば」を具体化したような表現を内包しているのではないだろうか。辛いのでこの場所では、全く生きていけそうもないという意が含まれているのである。「ねをたえて」は「根を断ちて」と「たえてゝず」とを合わせることによつて成立した表現ではなかったかと思われる。②の例歌も同様に、「根を断ちて」「絶えてこぬ」の合わせられた発想と思われる。

③の例歌は「菖蒲の根が切れたので」「共寝をすることが絶えたので」と解されているように、「ねをたえて」は「根絶えて」「寝絶えて」の掛詞と考えられている。「を」を間投助詞と理解するのであろうが、ここも①の例と同様に考えると、相手の男が「根（寝）を断ち」、そして「たえて逢瀬なく」という着想が圧縮された表現であると考えられる。「ねをたえて」は「根を断ち」「たえてゝ打ち消し」を圧縮した表現であるがそのことにより、「根を断ちてたえてゝ」に比べ、「根を」と「絶えて」が際立ち印象づけられる。「ねをたえて」が二つの文脈もつことを示す明らかな例として他に、「かずならぬ身をうきくさのねをたえて世にもすまじと」（『隆信集』九二九 長歌の一部）の「根を絶えて」「たえてすまじ」、「難波がたしたはふ蘆のねをたえてあらはれてただとふ人ぞなき」（『洞院百首』一〇三七・兵部卿成実）の「根を絶えて」「たえてとふ人ぞなき」の例をあげることが出来る。また、「ねをたえて」の形で

はなく、「ねをたゆ」の形で表現される例がある。

④ かぜふけばいけのうきくさかたよれどしたにかはづのねをたえぬかな

〔秋篠月清集〕二七二

⑤ よのうさのねをやたえなむやまがはにうれしくみづのさそふうきくさ

〔秋篠月清集〕一五〇八

④ については、蛙の鳴き声が絶えることではないと解することもできるが、「を」を不自然な間投助詞としてでなく、格助詞として次のように解したい。「ねを」の後に「聞くこと」を補い、「ねを（聞くこと）たえぬかな」として考えたいと思う。

⑤ については、「世の憂さという根が切れた」という意味と考えられるが、ここも「を」を格助詞として考えるときのように解釈出来る。世の憂さという根を断ち切った、そのことにより世の憂さが断ち切れたのだろうかという意味となる。「根を断ち」「憂さや絶えなむ」の二つの文脈が合わさった表現と考えられる。

自動詞に「を」という目的格を有することがあることは認められるが、「絶ゆ」という自動詞に「を」有す表現は「ねを絶え」と「梶を絶え」だけである。そのうち、「ねを絶え」について「を」を格助詞として解することは説明出来る。即ち、「梶を絶え」のみが例外的なものと解することは妥当とは言えない。また、「絶ゆ」は『古語大辞典』において「続いていたものが切れる」と説明されている。そのことは、例歌の「夢」「煙」「流れ」などからも判断されるが、「梶」は用例にもないように「絶ゆ」ものとして適切とはいえない。もし、認められるとするなら、「失くす」「無くする」のではなく、古註にある「折れる」と解さなければならぬ。「絶ゆ」の意味を重視するなら、「梶緒を絶え」は梶緒が切れたとする「梶緒絶え」と解することが適切だと思われる。

四

好忠歌の影響の最も早い例は『狭衣物語』に見られる。失踪した飛鳥井の女君が、偶然狭衣の大將の扇を見、その扇の書かれていた文字とその扇を見ての女君の歌である。

この扇を見れば（中略）仮名など書きまぜられたるを、泣く泣く見れば、渡る船人楫を絶え、と返す返す書かれたるは、我を思ひて書きたまふらんにもあらじを、（中略）

楫を絶え命も絶ゆと知らせばや涙の海に沈む船人

大將が記した扇の文字を、飛鳥井の女君は「我を思ひて書きたまふらんにもあらじを」と言うが、構成的には行方不明の女君を思つてのものである。「渡る船人楫を絶え」とは、好忠歌の「行方も知らぬ恋の道」を意味しており、女君の行方が知れない大將の嘆きと、思うにならない恋の嘆きを語つてるのである。この例からは「楫を」とも「楫緒」とも判断はつかないが、この好忠歌は『新古今』まで勅撰集には入集していないが、『狭衣物語』に引用されていることから当時広く知られていたことが分かる。

女君が詠じた歌は、扇の「渡る船人楫を絶え」がまさに今の自分の置かれた状況に重なるところから引用されたもので、入水への願望を詠じており、好忠歌からの内容上の直接的影響、「行方も知らぬ恋の道」という意味はないと言える。女君の詠じた歌、「楫を絶え命も絶ゆ」は「楫を」であれ「楫緒」であれ、「楫（楫緒）」を失ったことが命絶えることにつながることはない。楫をなくしたことは風まかせ、波まかせの不安が生じるが、誇張したり、死の暗示ではあつても、死に直接結びつくするのは歌の理にかなわない。「楫を絶え」だから「命も絶ゆ」のではない。

ここは「命も絶ゆ」を印象づけるための調べ上の要請であり、「梶を絶え」「命も絶ゆ」と「絶ゆ」を繰り返すことが重要であつたと考えられる。一首の構成として、「梶を絶え」「命も絶ゆ」と対句的に見ると「を」と「も」との対応の不調和が見える。次に「梶緒絶え」「命も絶ゆ」と解すると、「A絶え」「Bも絶ゆ」という構成となり、「命も」の添加としての「も」が生きると思われる。「AをBも」ではなく、「きよみがたひとりいはねの秋のよに月もあらしもころぞかなしき」(『秋篠月清集』五七三)の「月もあらしも」のように「AもBも」が基本の発想であり、ここでは「A、Bも」の形をとつたものと思われる。この女君の例歌は「梶緒絶え」と認識して詠じていると考えた方がよいのである。

次にこの「狭衣物語」の女君の歌を本歌とした良経の歌がある。

後京極殿御自歌合 六一番 左 後朝恋

今はとて涙の海にかぢをたえおきぞ煩ふ今朝の舟人

左の涙の海狭衣と申物語なん思出られて

一首は、今はといつて後朝の別れをし、その悲しさのため流した涙が海となり、海で「梶を絶え」沖に行きかねている今朝の舟人のように、私も今朝又寝の床から起きかねている、という意味と考えられる。櫂がなくなり沖へ行きかねているのか、梶緒が切れ沖へ行きかねているのかは判然としない。この例歌にあつては、「梶を絶え」は「おきぞ煩ふ」にかかる序詞として機能している。寢床から起きかねている作者の姿としては、為す術もなく絶望感から茫然としているのである。ただし、「梶緒絶え」とするとただ果然としているのではなく、一所懸命梶緒が切れた状態で櫂を漕ぐが効果はないのである。梶緒が切れて無意味に櫂をもっているため、より無力感が強まると言える。また「おきぞ煩ふ」の「おき」の掛詞として「沖」「起き」に「櫂を置き」の意味が加わる。舟人が意味なく櫂を漕ぎ、果

然としている景を読むことが適切だとは言い難いが、「梶緒絶え」と解した方が一首の内容が拡がるように思われる。

五

好忠歌の影響を受けた歌を通して「梶を絶え」「梶緒絶え」の問題を考えたが、決定的のことは分からないと言える。ここでは、好忠歌に立ち帰ってそれぞれの場合の意味を考え結論を下したいと思う。「由良の門をわたる舟人梶を絶え」は「行方も知らぬ恋の道かな」の有心の序であり、一首の眼目は下句にある。「新古今」の注釈書は次のようである。

- ① 「いかにしてよきやら、更にたよりなき恋であるよ」¹⁵
- ② 「恋路も頼むたよりもなく、自分ながら、どうしてよいかわからない心細さである」¹⁴
- ③ 「頼り所もなくどうしてよいか分からない、私の恋であるよ」¹⁵
- ④ 「どうなるかのおしもつかないわが恋である」¹⁶
- ⑤ 「これからどうしていいか、わからない恋の道だなあ」¹⁷
- ⑥ 「頼りにする人を失ってどうしてよいか判らないことである」¹⁸
- ⑦ 「どうなるかわからないわたしの恋の道であることだ」¹⁹
- ⑧ 「途方にくれて辿っているこの恋路よ」²⁰

それぞれ微妙に違うが、この恋がどうなるか分からず、またどうしてよいか手立てもわからない不安感、絶望感を理解しておられる。「行方も知らぬ」にどうなるか分からないという意味以外に、手立てがないことを解するのは「梶」をなくしたため、舟を漕ぐ手立てがないことを背景にしての理解である。權がないことで、舟を漕ぐことも出

来ず波に舟をまかせるしかないように、恋においてはなす術なく相手次第なのである。「梶緒」が切れたとすれば、
 權がない場合と同じく、絶望感を味わうしかないのであるが、權を漕ぐ行為が新たに付加される。梶緒が切れたため
 權が固定されず權を一所懸命漕いでも進まず、思う方向にも進まず甲斐がないように、いくら手紙を出そうとも、あ
 れこれ試みようとも心は相手に通じず虚しい、そのように恋は自分の思うようにはならないという嘆きを読みとるこ
 とが出来る。確かに恋の道は「行方も知らぬ」歎き、どうなるかわからない歎きをするものであるが、「ゆく水にか
 ずかくよりもはかなきはおもはぬ人を思ふなりけり」(「古今」恋一・五二二 読人しらず)、「思ひやる心はつねにか
 よへども相坂の関こえずもあるかな」(「後撰」恋一・五一六 三統公忠)に見えるように自分の思うようにならない
 嘆きを詠んでもいる。「行方も知らぬ」という嘆きは我が恋がどうなるかも分からず、ただ成り行きを見守っている
 だけというだけでなく、思い通りにならない恋の苦悩をも意味していることになる。その意味では手立てがないと歎
 く「梶を」説よりも、恋とは思ひ通りにならない不如意なものだと歎く「梶緒」説の方が恋の苦悩を言い得ているの
 ではないだろうか。

六

「梶」「絶ゆ」の用例を通して、「梶無し」と詠むことはあつても、「梶絶ゆ」と詠むことはないことが分かる。

それは、「絶ゆ」が意味的に連続しているものが途絶えることを表し、「梶」のような器具に対しては適切ではないこ
 とからきていると思われる。その点、「梶緒」が「絶ゆ」、梶緒が切れるというのは用例は好忠歌以前にはないが、「緒
 絶え」の例を考えた時、理ある発想と言える。好忠歌は「梶緒絶え」として詠んでいると思われる。そう考えると、

好忠歌の中心的抒情「行方も知らぬ恋の道」とは、我が恋の将来も見えず、すべき手だても分らないというのではなく、我が恋の将来も見えず、梶緒が切れて漕いでも漕いでも思う方向には進めないように、どんなに努力しても相手の心を自分の方に向けることは出来ない、恋の道とは自分の思い通りにはならないという失意と嘆きを詠じた歌として新しく解釈することが出来ると思われる。

註

- (1) 久保田淳氏著『新古今和歌集全評釈』第五卷（講談社・昭和五二年刊）一八二頁。
- (2) 同じく、窪田空穂氏は「中途で楫を失って」（『完本新古今和歌集』中巻・東京堂出版・昭和三九年刊・二四五頁、石田吉貞氏は「楫を失くして」とし「楫緒が絶えたとする説もある」（『新古今和歌集全註解』有精堂出版・昭和三五年刊・四五〇頁）と考察されている。但し、『日本古典文学全集 新古今和歌集』（小学館・昭和四九年刊。新編・一九九五年刊も同様である。）では「楫緒絶え」とし、上坂信男氏も「楫の綱を切って」（『百人一首・耽美の空間』右文書院・昭和五四年刊・一三〇頁）と語釈されている。
- (3) 『日本国語大辞典』第二巻（小学館・昭和四八年刊）、『古語大辞典』（小学館・昭和五八年刊）においても「かじを船に取り付ける縄。艀縄」と説明し、同じく好忠歌を引いている。
- (4) 吉海直人氏著『百人一首の新考察』（世界思想社・一九九三年刊）一四五頁、『百人一首の新研究』（和泉書院・二〇〇一年刊）、『百人一首への招待』（ちくま新書・一九九八年刊）に詳しい。
- (5) その他『新古今』古註においては、この好忠歌ではないが、好忠歌を本歌とした、『新古今』一〇七三・良経歌「かぢをたえゆらのみなとによるふねのたよりもしらぬおきつしほかぜ」について『増補本新古今集聞書』（内閣文庫本）、『新古今増抄』（寛文三年版本）が同様の見解を示している。
- (6) 註（一）に同じ。一八二頁。
- (7) 註（二）の石田吉貞氏前掲書に「絶ゆ」を他動詞的に使うことは、「身を浮草の根を絶えて」等、古くは多く見えた」（四五〇頁）と説明されている。

(8) 『伊勢集』には、「ねをたえてみづにとまれるうき草はいけのふかさをたのむなりけり」(『古今和歌六帖』(三八三五)では、「とまれる」が「うかべる」に、「なりけり」が「なるべし」となっている)がある。

(9) 竹岡正夫氏著『古今和歌集全評釈下』(右文書院・昭和五六年刊) 九三八頁。

(10) 『新日本古典文学大系 後拾遺和歌集』

(11) 『古語大辞典』(小学館・昭和五八年刊)

(12) 但し、吉海直人氏は前掲書『百人一首の新考察』において「成立以後平安後期に至るまで、ほとんど評価されてはいなかったようである」(一四五頁)と考察されている。

(13) 鹽井正男氏著『新古今和歌集詳解』(明治書院・大正一四年刊) 八一頁。

(14) 尾上八郎氏著『評釈新古今和歌集下』(明治書院・昭和二七年刊) 五〇六頁。

(15) 石田吉貞氏著『新古今和歌集全註解』(有精堂出版・昭和三五年刊) 四五〇頁。

(16) 窪田空穂氏著『完本新古今和歌集中巻』(東京堂出版・昭和三九年刊) 二四五頁。

(17) 註(1)に同じ。一八一頁。

(18) 『日本古典文学大系新古今和歌集』(岩波書店)

(19) 『日本古典文学全集新古今和歌集』(小学館)

(20) 『新日本古典文学全集新古今和歌集』(岩波書店)

付記 テキストとして、和歌の引用は『新編 国歌大観』(角川書店)、『狭衣物語』は『新編日本古典文学全集 狭衣物語』(小学館・一九九九年刊)、『新古今和歌集聞書』『かな傍注本新古今和歌集』は『新古今集古注集成』(笠間書院・一九九七年刊)を用いた。